

# 大学正課体育における授業効果に 関する調査研究

海野 孝，阿江 通良，松下 雅雄  
木原 資裕，外川 重信

## Study on effects of university regular physical education class

Takashi Kaino, Michiyoshi Ae, Masao Matsushita  
Motohiro Kihara and Shigenobu Sotokawa

### Abstract

The purpose of this study was to ascertain the effects of university regular physical education class on the feeling of students to the objects of physical education, using a questionnaire.

The questionnaire was conducted in Jan. to Feb. 1984 and the questions were divided into two categories, i.e.. I) questions asking the present feelings which students entertained to the objects of physical education and II) questions asking the effects of the regular physical education at the university on their feelings. Each category contained the questions concerning 1) preservation and improvement of health, 2) preservation and improvement of physical fitness, 3) acquisition of motor skills, 4) development of social attitude and 5) development of foundation for life sport activity. Responses were obtained through a 5-point-scale-type selection (5-agree very well, 4-agree, 3-neither, 2-disagree, 1-disagree at all).

1563 students (the freshman to the senior) taking regular physical education classes at University of Tsukuba served as the subjects. Effective number of the samples was 1085 (recovery rate 69.4%).

The results were summarized as follows:

1) The following eleven items showed that the positive responses were significantly larger in the seniors than the freshmen; ① intention to practice of sports for the preservation and improvement of health in the future, ② physical fitness (coordination and balance between physical fitness and physique), ③ improvement of phys-

ical fitness after the start of college life (strength and power, coordination and endurance), ④ intention to practice of sports for the preservation and improvement of physical fitness in the future, ⑤ possession of sports whose skills were enough to enjoy the sports, ⑥ improvement of skills after the start of college life, ⑦ understandings of practice and coaching method for the improvement of skills, ⑧ intention to practice of sports for the improvement of the skills, ⑨ evaluation of the skill level of sports, ⑩ leadership in sport activity, and ⑪ promotion of sports activity and leadership. This results may suggest that there was some effect of physical education classes during four years. The items in which the positive responses were significantly less in the seniors than the freshmen were ① participation in sport events in the future, ② intention to participation in sport events in the future.

2) With respect to the questions to the effects of the regular physical education, the following four items showed that the positive responses were significantly larger in the seniors than the freshmen ; ① understanding of the importance of health, ② intention to practice of sports for the preservation and improvement of physical fitness, ③ intention to practice of sports for wealthy life, ④ interest in sports and its practice. It is supposed that the good effects of physical education class appeared with the progress of school year.

3) Based on the results of the survey it was revealed that the present status of feeling to the objects of physical education was satisfactory as a whole, and that the regular physical education was effective to attain the objects of physical education from the viewpoint of the feeling.

4) 68 percents of the students showed positive response to the question, i.e. the significance of taking regular physical education over four years for wealthy student life. It was revealed that most of the students positively evaluated 4-year regular physical education system uniquely excuted at University of Tsukuba.

## I 緒 言

本研究は、昭和57年度及び昭和58年度に行われた体育センター・プロジェクト研究、「大学正課体育における授業効果に関する研究」の一部、「意識の変容に関するアプローチ」の一環として行われたものである。

大学における体育授業の効果を把握できるような尺度を開発し、これを定期的 to 実施して資料を入手することは、個々の学生への指導や、次年度からの指導法の改善など実際の授業場面にきわめて有効な情報を提供するも

のと考えられる。

既に著者らは、このような尺度を開発していくための基礎資料を得ようとして、昭和52年に実施された「正課体育に関する調査」<sup>(1)</sup>を昭和55年に再度実施した。この調査の中から体育授業の効果測定に利用できると考えられる項目、すなわち、「スポーツに対する関心や興味」、「レジャー・スポーツによって満たされる事柄」、「健康・体力・運動能力の自信」及び「体育・スポーツ環境に対する満足度」などについて4年間の変化を分析、検討し、その成果を「大学体育研究第3号」に報告し

た。そして、授業効果を測定するためには、これらの項目では不十分であり、本学体育の目標をより具体的に明確にすることと、その上でそれぞれを測定し得るような適切な尺度を開発することが必要であると指摘した<sup>(3)</sup>。

このような立場から、本研究では、文献より体育の具体的な目標を抽出し、これらに基づいて5つの領域にわたる質問項目を作成し、調査を実施した。

## Ⅱ 研究方法

### 1. 調査用紙の作成

調査は質問紙法により行った。

調査項目は、Ⅰ：体育授業の目標に関する現在の状態についてのものと、Ⅱ：本学正課体育授業の効果についてのものに分け、それぞれには、1.健康の保持・増進、2.体力の維持・向上、3.運動技能の習得、4.社会的態度や能力の育成、5.生涯体育への基礎づくり、の各体育目標に関する質問を設けた。

調査項目としての体育目標は、1970年以後に出版された、わが国の体育原理及び体育科教育に関する著書<sup>(2)(4)(5)(6)</sup>、及び本学学生を対象に編まれた「大学体育教本」<sup>(7)</sup>の中から、体育目標に関する章の記述を抽出して設定した。各項目についての質問は、著者らが原案を作成し、それを様々な観点から検討してまとめるという過程を数回繰り返して作成した。これらの質問に対する回答は、5段階法（5.非常によく当てはまる、4.当てはまる、3.どちらとも言えない、2.あまり当てはまらない、1.まったく当てはまらない）によって回答させた（巻末資料Ⅲ調査用紙参照）。

### 2. 調査の実施方法及びデータの処理

#### (1) 調査の実施方法

調査対象は、筑波大学で正課体育を受講している学生1年生～4年生1563名で、抽出は無作為に行った。

調査は、昭和59年1月下旬から2月上旬にわたって行い、授業時間内に記入させ、回収するという方法をとった。

回収されたサンプル数は1097で、その中で有効なものは1085であり、有効回収率は69.4%であった。その内訳は1年生195、2年生219、3年生380、4年生291であった。

#### (2) データの処理

調査用紙の回答をフロッピーディスクを媒体として筑波大学学術情報処理センターの大型電算機（FACOM M-200）に入力し、SPSSプログラムパッケージにより、質問に対する各回答の頻度数の算出、質問間のクロス集計などを行った。

## Ⅲ 結果及び考察

図1～図14は、各質問項目に対する応答を、「非常によく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5つの応答別に、その出現率を帯グラフで表したものである。それぞれの質問項目について、1年生から4年生までの全学年によるものと、1年生だけのもの、4年生だけのものとの3通りの結果を示しておいた。これは全体の傾向を把握するためと、1年生と4年生を比較することによって、在学中における変化を把握しようとしたためである。以下領域別に現在の状態について、体育授業の効果についての順で見えていくことにする。

### 1. 健康の保持・増進に関して

#### (1) 現在の状態について

図1は、健康の保持・増進に関する現在の状態についての、5項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果では、「A.身体的・精神的に健康」については62%と半数以上の者が「非常によく当てはまる」または「当てはまる」と肯定的に答えている。「当てはまらない」ま

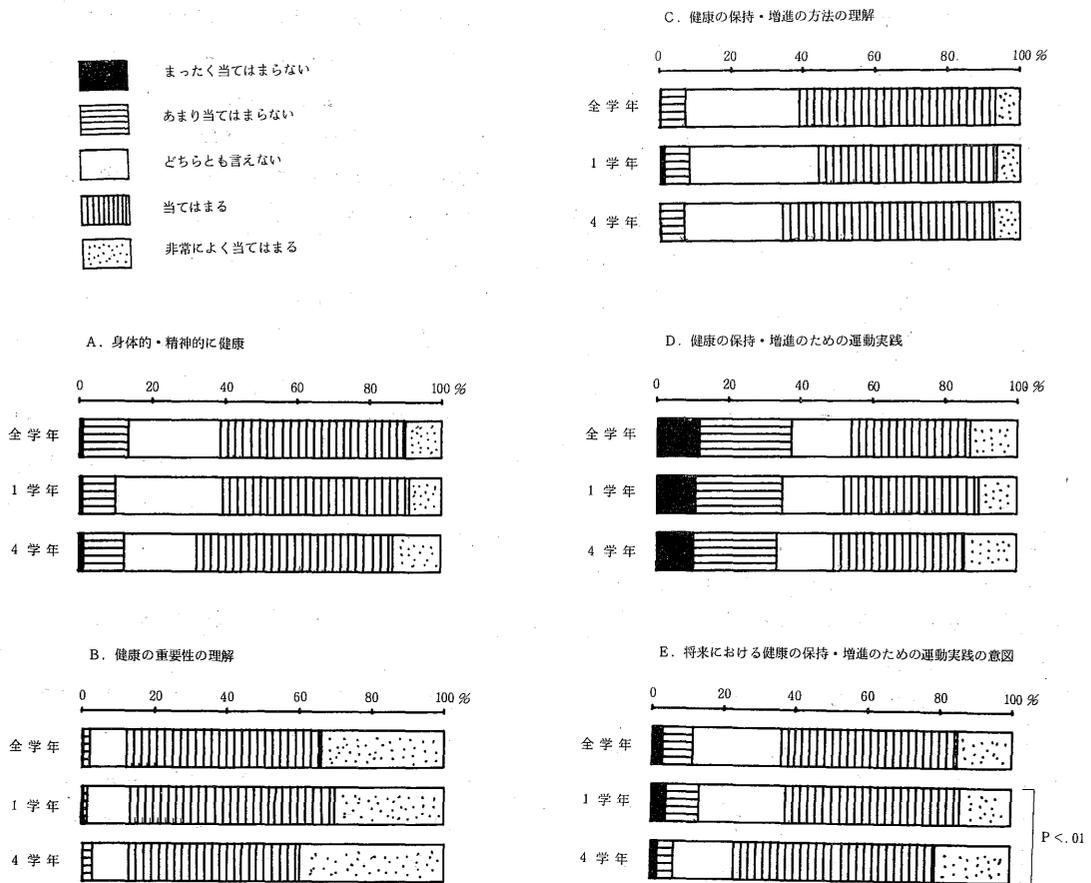


図1. 現在の状態に関する応答結果  
—「健康の保持・増進」—

たは「まったく当てはまらない」と否定的に答えた者は12%と少ない。

他の4項目においても、否定的な応答よりも肯定的な応答が多く、健康の保持・増進に関しては、全体的に良好な状態にあることがわかる。とくに、「B. 健康の重要性の理解」では88%と多くの者が肯定的な応答を示しており、否定的な応答はわずか2%であった。「C. 健康の保持・増進の方法の理解」でも肯定的な応答(62%)が否定的な応答(8%)よりも著しく多い。しかし、「D. 健康の保持・増進のための運動実践」では否定的な応答が37%と多くなり、肯定的な応答(46%)との

差が小さくなっており、運動実践のレベルにおいて問題があると考えられる。ただし、「E. 将来における健康の保持・増進のための運動実践の意図」では、肯定的な応答が64%と多くなり、否定的な応答は11%と少なくなっている。したがって、運動実践の必要性は認めているものの、現在は何らかの理由で運動を実践していないという者が25%近く存在しているといえる。

次に、1年生と4年生の応答結果を比較してみると、全体的な傾向として、4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多く、否定的な応答が少ないことがわかる。 $\chi^2$  検定の結

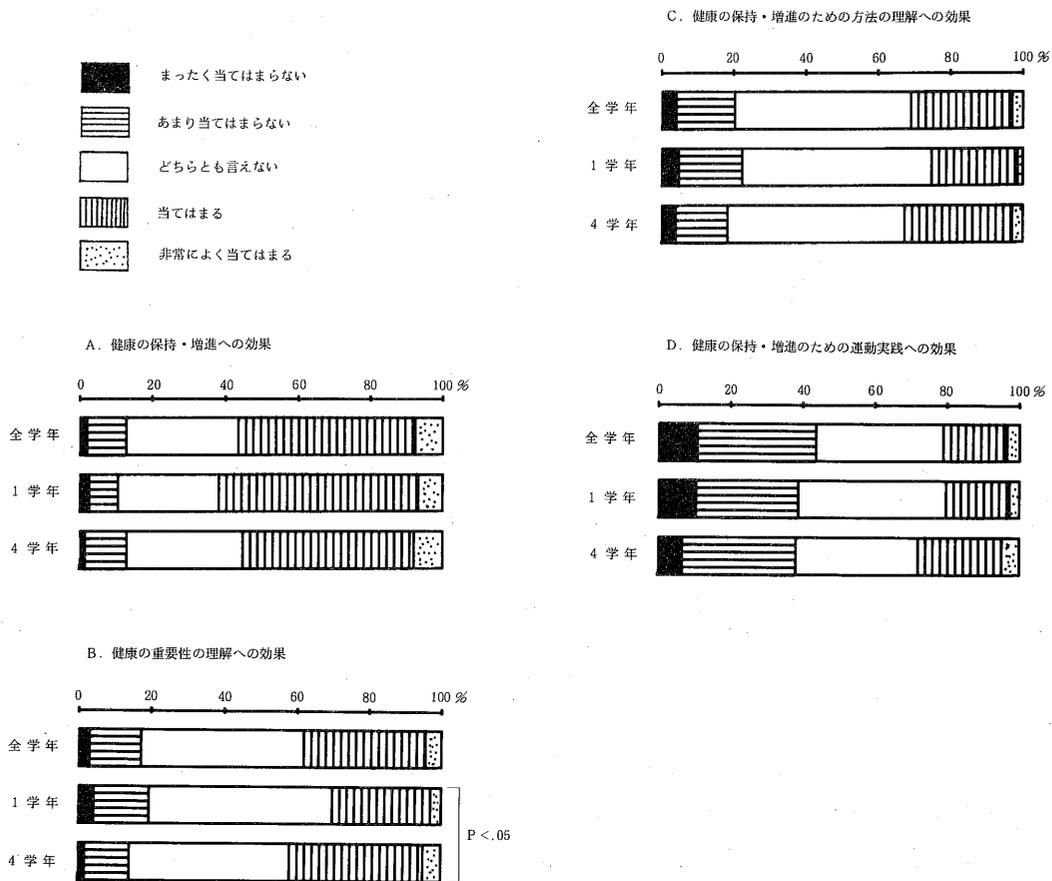


図2. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「健康の保持・増進」—

果、「E. 将来における健康の保持・増進のための運動実践の意図」において1%水準で有意な差が認められた。体育目標に関する現在の状態の変化をすべて体育授業によるものと決めつけることはできないが、体育授業の効果が少ないからと関与していると考えられる。

(2) 体育授業の効果について

図2は、健康の保持・増進に関する体育授業の効果についての、4項目の質問に対する応答結果を示したものである。

図1で見てきた現在の状態は、大学体育授業だけでなく、高校までの体育授業、あるいは、日常生活における各種の要因が反映されているのに対し、図2に示した体育授業の効

果は、大学における体育授業の効果そのものを問題にしており、したがって同一の事柄に対しても両者における応答結果は当然異なったものとなる。

全学年の結果を見ると、「A. 健康の保持・増進への効果」では肯定的な応答が57%と半数を越えているが、「B. 健康の重要性の理解への効果」では38%、「C. 健康の保持・増進のための方法の理解への効果」では31%、「D. 健康の保持・増進のための運動実践への効果」では21%と、次第に肯定的な応答が少なくなっている。逆に、否定的な応答は、Aが13%、Bが17%、Cが20%、Dが43%と次第に多くなっている。すなわち、体育

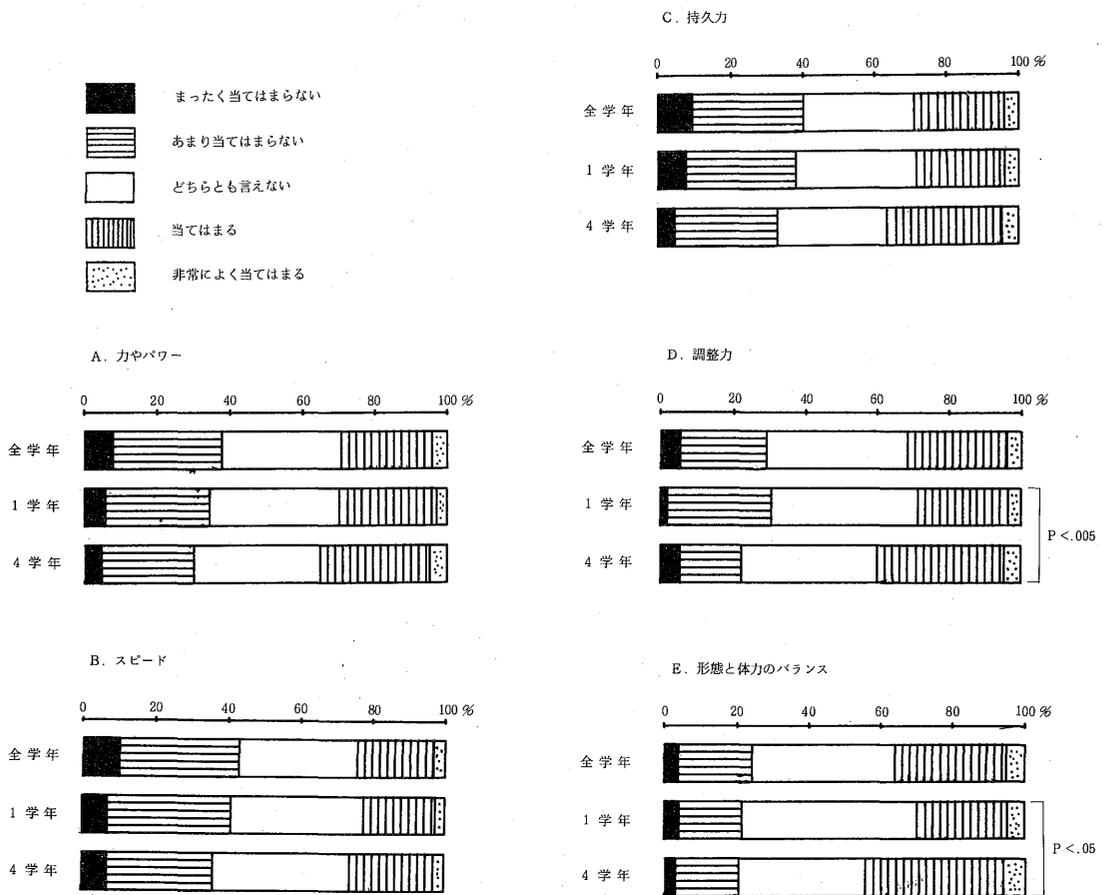


図3. 現在の状態に関する応答結果  
—「体力水準」—

の授業は、健康の保持・増進そのものには効果的であるが、健康の重要性の理解やそのための方法の理解といった認識のレベルに訴える力が弱く、さらに、健康のための自主的な運動実践のレベルとなると、効果は一層低くなっているといえる。このことから、認識のレベル、あるいは、否定的な応答が多かった運動実践のレベルへの効果を高めていくことが今後の体育授業の課題として上げられる。

1年生と4年生の応答を比較してみると、A以外の3項目では4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多くなっている。 $\chi^2$ 検定の結果、「B. 健康の重要性の理解への効果」

において、5%水準で有意な差が認められた。したがって、ここでは、徐々にではあるが、認識のレベル、あるいは、運動実践のレベルへの4年間の体育授業の効果が認められる。

## 2. 体力の維持・向上に関して

### (1) 現在の状態について

図3のA～Dは、「体力があると思う」という質問に対して4項目の体力要素別に応答させた結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、どの体力要素においても肯定的な応答は30%前後、否定的な応答は30～40%の値を示している。ただし、「D.

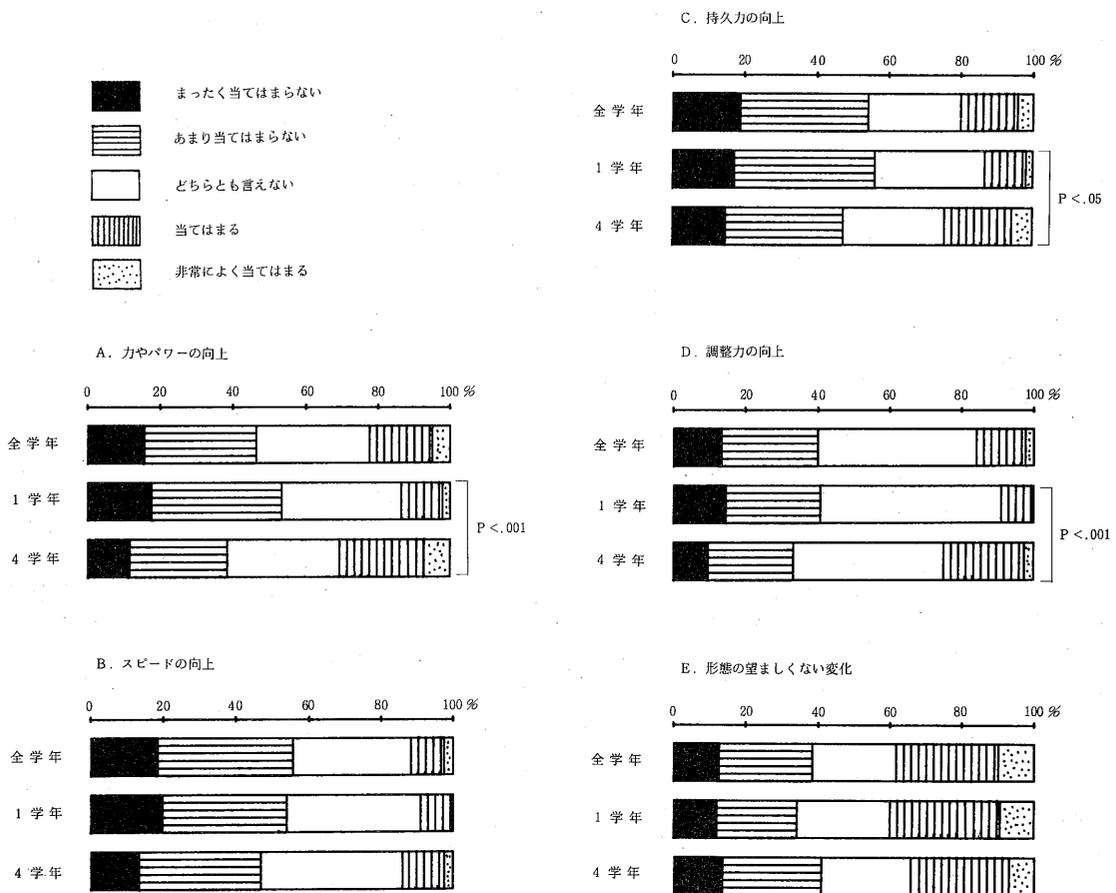


図4. 現在の状態に関する応答結果  
—「大学入学後の体力の向上」—

調整力」だけは肯定的な応答と否定的な応答の割合がほぼ等しい。他の「A. 力やパワー」, 「B. スピード」, 「C. 持久力」の3項目では、否定的な応答が肯定的な応答よりも10~15%多い。図1の「A. 身体的・精神的に健康」についての結果と比べると、著しく低い値であり、健康には自信があるが体力には自信がないという者が30%近く存在していることがわかる。

図3のEは、「形態と体力のバランス」についての結果であるが、これは肯定的な応答が36%、否定的な応答が24%と、体力要素(A~D)に比べると肯定的な応答が多い。

1年生と4年生の応答を比較してみると、どの種目においてもすべて、4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なくなっている。 $\chi^2$ 検定の結果、「D. 調整力」については0.5%水準で、「E. 形態と体力のバランス」については5%水準で有意な差が認められた。実際の体力測定の結果では、4年生のほうが1年生よりも低い値を示しているのに、体力に関する自信では4年生のほうが高いという結果が報告されている<sup>(8)</sup>。本研究の結果においても、同様の傾向が示された。

図4のA~Dは、「大学入学後の体力の向

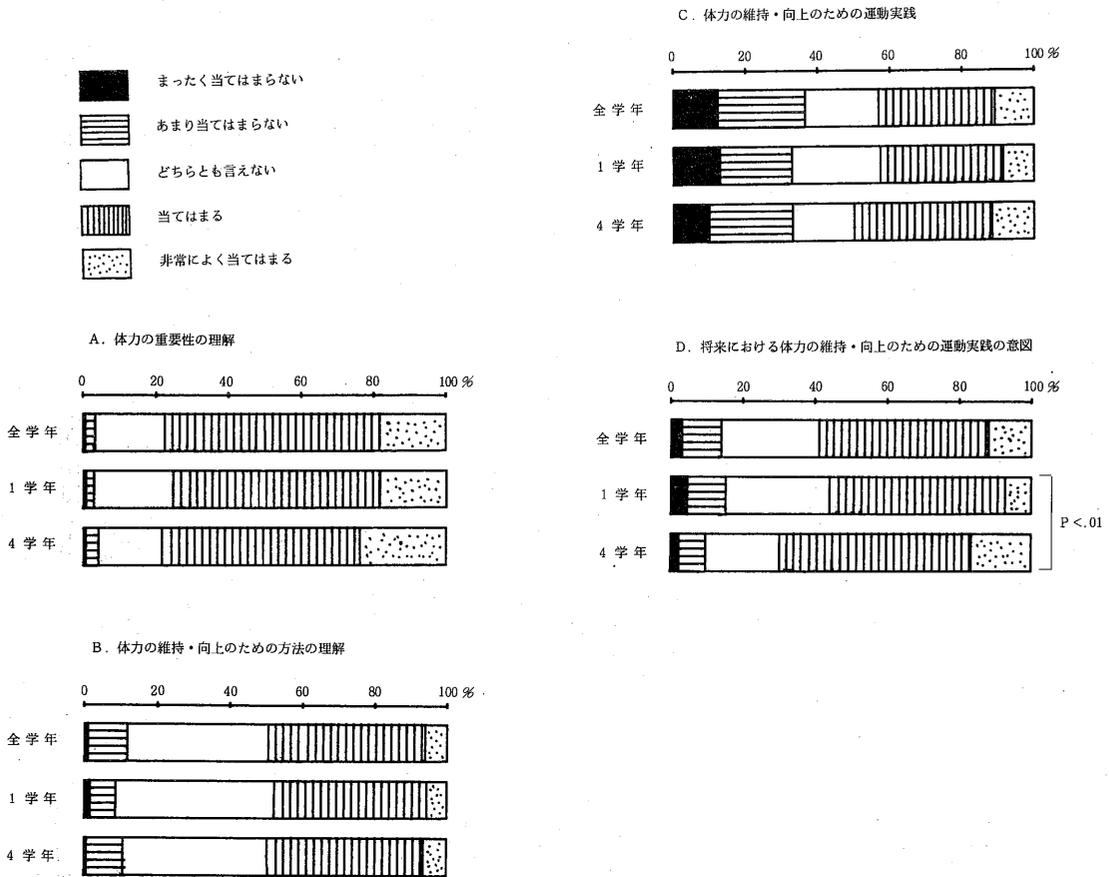


図5. 現在の状態に関する応答結果  
—「体力の維持・向上」—

上」について、4項目の体力要素別に応答させた結果を示したものである。また、図4のEは、大学入学後の「形態（身長、体重、皮脂厚、腕の太さ、大腿の太さ）の望ましくない変化」についての結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「E. 形態の望ましくない変化」については、肯定的な応答、否定的な応答ともに40%弱の値であるが、「体力の向上A～D」については、いずれも肯定的な応答（10～20%）よりも否定的な応答（40～55%）が著しく多いことがわかる。このことは、実際の体力測定の結果も大学においては停滞ないしは若干の低下を示す傾向に

あり、そのことを学生が自覚している結果とみることができよう。

1年生と4年生の応答を比較してみると、A～Dについては、4年生のほうが肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なくなっている。また、Eについては、この逆になるが、いずれも4年生のほうが1年生よりもプラスのイメージを抱いていることがわかる。 $\chi^2$ 検定の結果、「A. 力やパワーの向上」、「C. 持久力の向上」、「D. 調整力の向上」の3項目において1年生と4年生の応答の間に有意な差が認められた。

図5は、体力の維持・向上に関する現在の

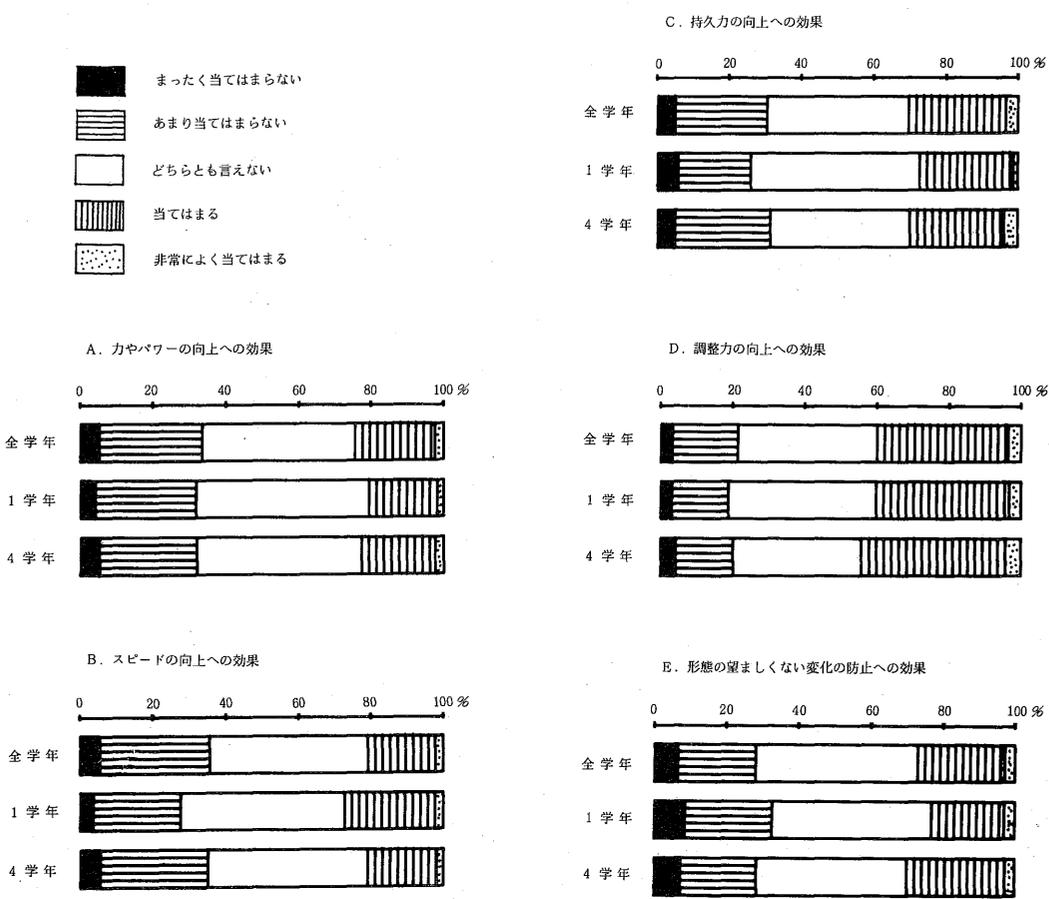


図6. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「体力の向上」—

状態について、方法の理解や運動実践などの質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. 体力の重要性の理解」では、肯定的な応答が78%、否定的な応答はわずか3%であり、多くの者が体力の重要性を理解していることがわかる。しかし、「B. 体力の維持・向上のための方法の理解」では、肯定的な応答が49%、否定的な応答が12%、「C. 体力の維持・向上のための運動実践」では、肯定的な応答が43%、否定的な応答が37%と、次第に肯定的な応答が少なくなり、否定的な応答が多くなっている。健康の場合と同様に運動実践のレベルにおい

て問題があると考えられるが、「D. 将来における体力の維持・向上のための運動実践の意図」においては、肯定的な応答が60%と多くなっている。これらの結果は、図1のB～Eで見てきた「健康の保持・増進」に関する結果とよく類似した結果であるといえる。

1年生と4年生の応答を比較してみると、健康の場合と同様、いずれの項目においても4年生のほうが肯定的な応答が多くなっている。 $\chi^2$  検定の結果、「D. 将来における運動実践の意図」において1%水準で有意な差が認められた。

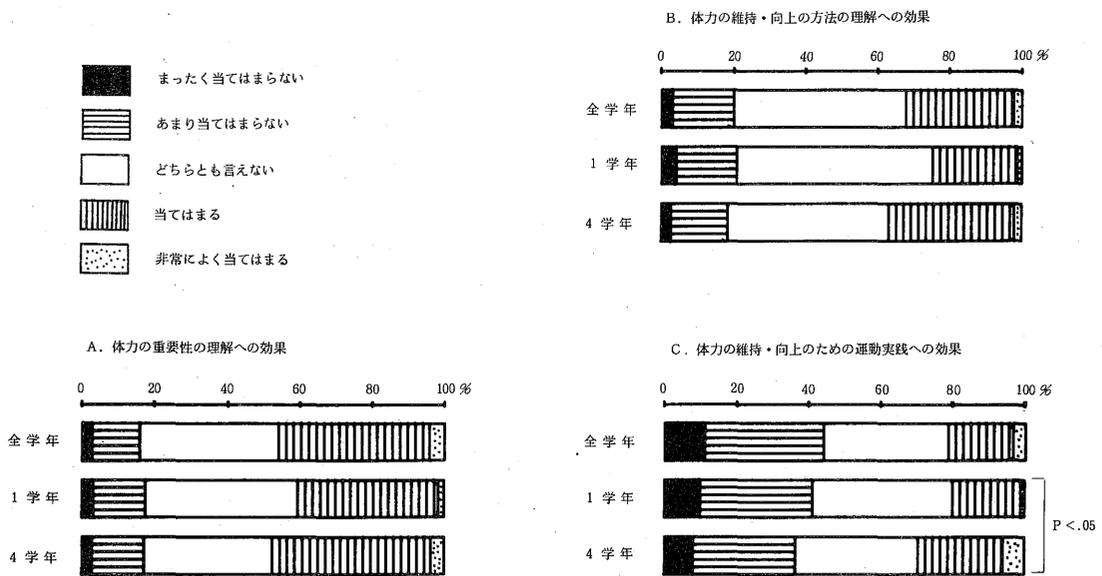


図 7. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「体力の維持・向上」—

## (2) 体育授業の効果について

図 6 の A～D は、体力の向上に関する体育授業の効果について 4 項目の体力要素別に応答させた結果を示したものである。また、図 6 の E は、形態の望ましくない変化の防止に関する体育授業の効果についての結果である。

全学年の結果を見ると、「D. 調整力の向上への効果」では肯定的な応答 (40%) が否定的な応答 (21%) よりも多いが、「C. 持久力の向上への効果」及び「E. 形態の望ましくない変化の防止への効果」では、肯定的な応答、否定的な応答ともに約 30% と等しく、「A. 力やパワーの向上への効果」及び「B. スピードの向上への効果」では、肯定的な応答 (20～25%) よりも否定的な応答 (30～35%) が多い。

これらは、図 2 の A で見た「健康の保持・増進への効果」と比べると著しく低い値であり、健康に比べ、体力への体育授業の効果は少ないと考えられる。一方、図 4 で見た「大学入学後の体力の向上や形態の変化」に比

べると、肯定的な応答が 5～20% 多くなっており、現在の状態としてはあまり向上していないものの、体育授業の効果を認めている者が存在していることがわかる。

1 年生と 4 年生の応答を比較したところ、 $\chi^2$  検定の結果、いずれの項目においても有意差は認められなかった。

図 7 は、体力の維持・向上に関する体育授業の効果について、方法の理解や運動実践などの 3 項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. 体力の重要性の理解への効果」では 46% と半数に近い者が肯定的な応答を示しており、否定的な応答は 16% と少ない。しかし、「B. 体力の維持・向上のための方法の理解への効果」及び「C. 体力の維持・向上のための運動実践への効果」では、次第に肯定的な応答が少なくなり (B は 32%, C は 21%), 否定的な応答が多くなっている (B は 20%, C は 44%)。

図 2 で見てきた「健康の保持・増進に関す

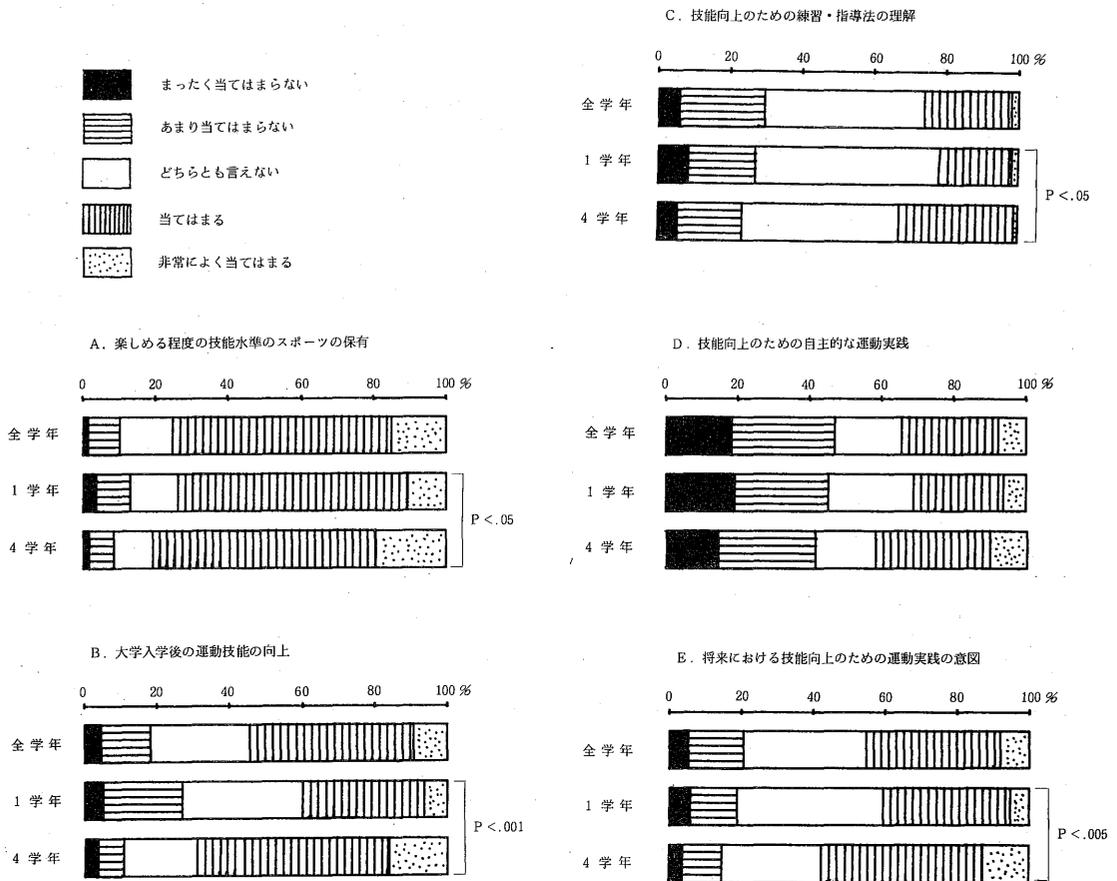


図 8. 現在の状態に関する応答結果  
 —「運動技能の習得 その 1」—

る「体育授業の効果」における結果と同様、認識のレベル、あるいは、否定的な応答が多かった運動実践のレベルへの効果を一層高めていくことが今後の重要な課題として指摘される。

1 年生と 4 年生を比較してみると、いずれの項目においても 4 年生のほうが 1 年生よりも肯定的な応答が多くなっており、 $\chi^2$ 検定の結果、「C. 体力の維持・向上のための運動実践への効果」において 5%水準で有意な差が認められた。したがって、ここでは、徐々にではあるが、4 年間の体育授業の効果が認められる。

### 3. 運動技能の習得に関して

#### (1) 現在の状態について

図 8 及び図 9 は、運動技能の習得に関する現在の状態についての、8 項目の質問に対する応答結果を示したものである。

図 8 における全学年の結果を見ると、「A. 楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有」については、76%と多くの者が肯定的な応答を示しており、否定的な応答は10%と少ない。「B. 大学入学後の運動技能の向上」でも50%と半数の者が肯定的な応答を示している（否定的な応答は18%）。これは図 4 の A～D に示した「大学入学後の体力の向上」における結果よりも高い値である。大学においては、

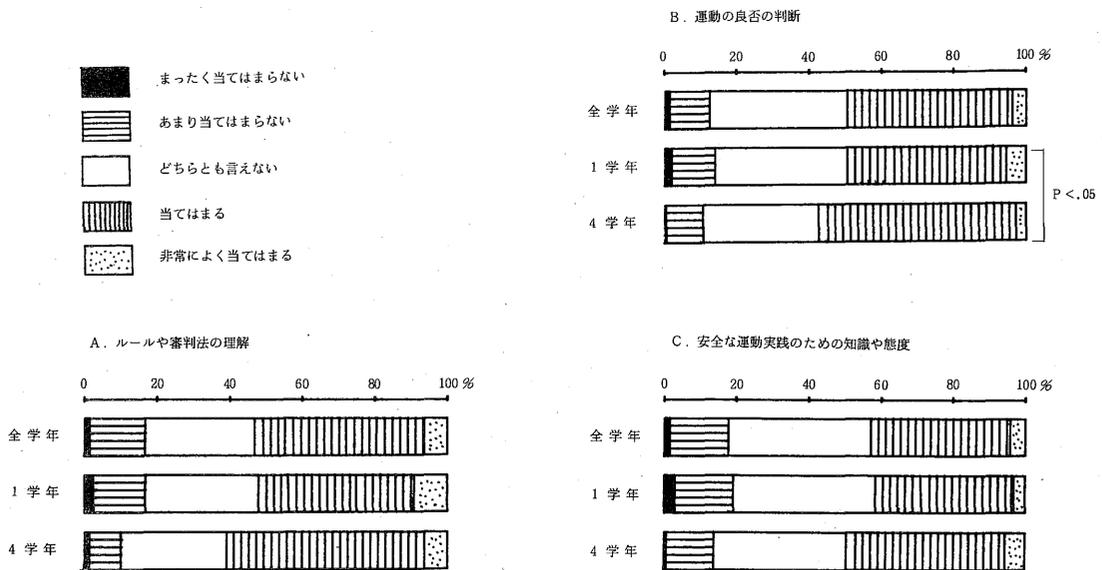


図9. 現在の状態に関する応答結果  
—「運動技能の習得 その2」—

体力の向上よりも技能の向上に関してより多くの者がプラスのイメージを抱いていることがわかる。

しかし、「C. 技能向上のための練習・指導法の理解」, 「D. 技能向上のための自主的な運動実践」では、いずれも肯定的な応答よりも（Cは26%, Dは35%）否定的な応答が（Cは30%, Dは47%）多くなっている。健康や体力の場合と同様に、運動実践のレベルにおいて問題があると考えられるが、「E. 将来における技能向上のための運動実践の意図」においては、45%と半数近くの者が肯定的な応答を示している。

次に、図9における全学年の結果を見ると、「A. ルールや審判法の理解」, 「B. 運動の良否の判断」, 「C. 安全な運動実践のための知識や態度」のいずれの項目においても、肯定的な応答が（Aは52%, Bは50%, Cは43%）否定的な応答よりも（Aは17%, Bは12%, Cは18%）多い。

図8及び図9について、1年生と4年生の

応答を比較してみると、すべての項目で4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なくなっていることがわかる。 $\chi^2$ 検定の結果、図8の「A. 楽しめる程度の技能水準のスポーツの保有」, 「B. 大学入学後の技能の向上」, 「C. 技能向上のための練習・指導法の理解」, 「E. 将来における技能向上のための運動実践の意図」及び図9の「B. 運動の良否の判断」の5項目において、有意な差が認められた。したがって、これらの項目においては、4年生のほうが1年生よりも良好な状態にあるといえ、大学体育授業の効果が少なからず関与しているものと推察される。

#### (2) 体育授業の効果について

表1は、運動技能の向上に関する体育授業の効果についての応答結果を20の開設種目ごとに示したものである（本学では定時の授業として26種目が開講されているが、この内、回答者数が10以下の6種目は除外した）。

20種目中16種目において肯定的な応答が50

表 1. 運動技能の向上に関する開設種目別応答結果

科目名	まったく 当てはまらない	あまり 当てはまらない	どちらとも 言えない	当てはまる	非常によく 当てはまる	計
体操トレーニング	5 (2.1)	34 (14.4)	76 (32.2)	110 (46.6)	11 (4.7)	236 (100.0)
陸上運動	4 (2.8)	14 (9.7)	50 (34.7)	65 (45.1)	11 (7.6)	144 (100.0)
基本運動	2 (1.0)	13 (6.3)	76 (36.5)	100 (48.1)	17 (8.2)	208 (100.0)
器械運動	3 (2.5)	8 (6.8)	35 (29.7)	59 (50.0)	13 (11.0)	118 (100.0)
水泳	1 (0.4)	7 (2.9)	33 (13.5)	122 (49.8)	82 (33.5)	245 (100.0)
オリエンテーリング	1 (1.8)	5 (8.9)	11 (19.6)	29 (51.8)	10 (17.9)	56 (100.0)
サイクリング	3 (2.7)	17 (15.3)	55 (49.5)	35 (31.5)	1 (0.9)	111 (100.0)
ゴルフ	1 (3.2)	5 (16.1)	10 (32.3)	12 (38.7)	3 (9.7)	31 (100.0)
柔道	7 (4.1)	18 (10.5)	60 (35.1)	69 (40.4)	17 (9.9)	171 (100.0)
剣道	4 (2.3)	19 (10.9)	60 (34.3)	76 (43.4)	16 (9.1)	175 (100.0)
サッカー	2 (1.4)	11 (7.5)	37 (25.2)	85 (57.8)	12 (8.2)	147 (100.0)
ラグビー	3 (3.4)	3 (3.4)	16 (18.4)	47 (54.0)	18 (20.7)	87 (100.0)
バスケットボール	5 (1.8)	26 (9.3)	100 (35.6)	125 (44.5)	25 (8.9)	281 (100.0)
バレーボール	3 (1.8)	13 (7.7)	43 (25.6)	89 (53.0)	20 (11.9)	168 (100.0)
ハンドボール	2 (1.3)	11 (7.4)	36 (24.2)	83 (55.7)	17 (11.4)	149 (100.0)
野球	3 (9.7)	3 (9.7)	16 (51.6)	7 (22.6)	2 (6.5)	31 (100.0)
硬式テニス	6 (2.0)	16 (5.3)	71 (23.7)	179 (59.7)	28 (9.3)	300 (100.0)
バドミントン	2 (1.4)	5 (3.4)	61 (41.5)	63 (42.9)	16 (10.9)	147 (100.0)
卓球	3 (6.1)	5 (10.2)	12 (24.5)	26 (53.1)	3 (6.1)	49 (100.0)
トリム運動	2 (14.3)	4 (28.6)	7 (50.0)	0 (0.0)	1 (7.1)	14 (100.0)

％以上、否定的な応答は17％以下であり、体育の授業が運動技能の向上にきわめて効果的であることがわかる。肯定的な応答が60％以上の種目は、「水泳」(83％)、「ラグビー」(74％)、「オリエンテーリング」(70％)、「硬式テニス」(69％)、「ハンドボール」(67％)、「サッカー」(66％)、「バレーボール」(65％)、「器械運動」(61％)の8種目であり、いずれも技能の向上が現われやすい種目である。また、否定的な応答のほうが多い種目としては「トリム運動」があげられるが、この授業は障害をもつ学生を対象としており、特定の運動の技能の向上というよりも、様々な運動を通して体力の維持を図ろうとするもので、否定的な応答が多くなったのは当然といえる。

図10は、運動技能の習得に関する体育授業の効果について、練習法や指導法の理解、運動実践などに対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. 技能向上のための練習法や指導法の理解への効果」では、

肯定的な応答が半数の50％であり、否定的な応答は11％と少ない。これは、「健康の保持・増進のための方法の理解への効果」(図2のC)、あるいは、「体力の維持・向上のための方法の理解への効果」(図7のB)に比べて高い値を示している。これは、本学における体育の授業の多くが技能の習得を中心にした授業展開になっていることと関連しているものと推察される。

しかし、「B. 技能向上のための運動実践への効果」では、健康や体力の場合と同様に、肯定的な応答(21％)よりも否定的な応答(42％)が多い(図2のD、図7のC参照)。

「C. ルールや審判法の理解への効果」、 「D. 運動の良否判断への効果」、及び「E. 安全な運動実践のための知識や態度への効果」においては、いずれも肯定的な応答(Cは56％、Dは39％、Eは47％)が、否定的な応答(Cは13％、Dは16％、Eは12％)よりも多く、体育授業の効果が認められる。

1年生と4年生の応答結果を比較してみる

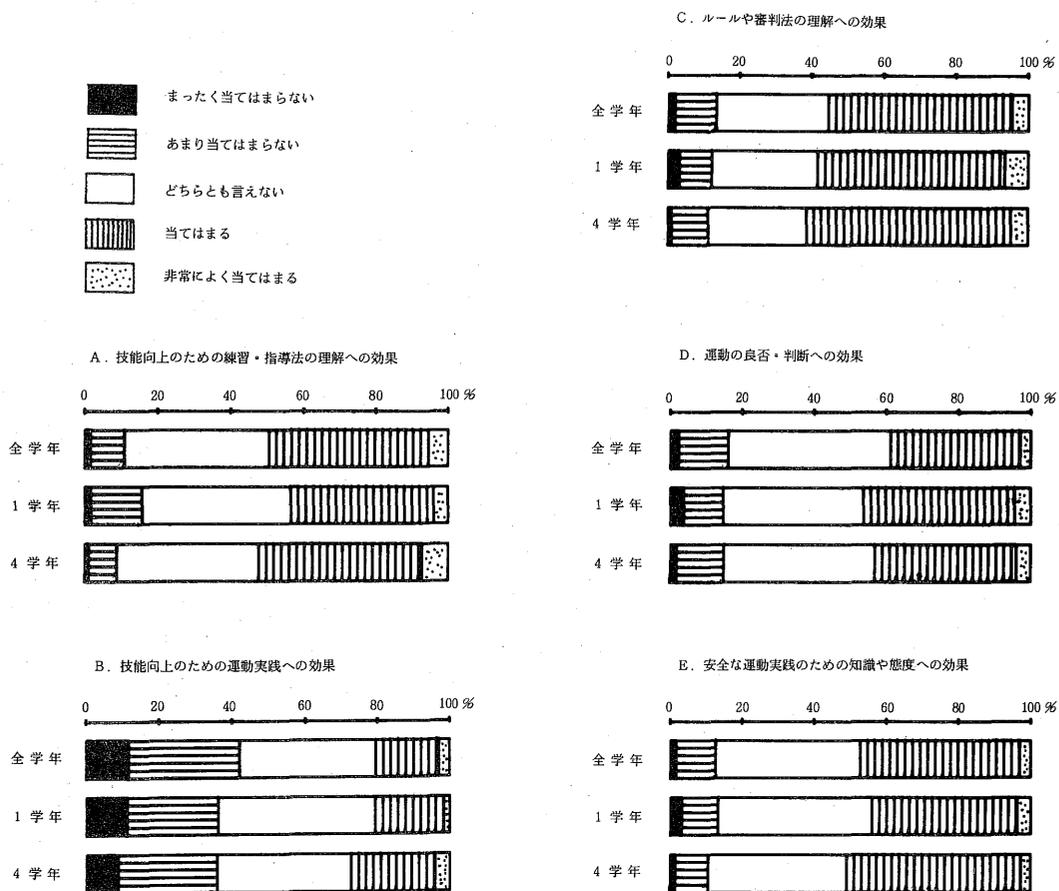


図10. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「運動技能の習得」—

と、「D. 運動の良否判断への効果」以外はいずれも、4年生のほうが肯定的な応答が多いがその差はわずかである。 $\chi^2$ 検定の結果はいずれの項目においても有意な差は認められなかった。

#### 4. 社会的態度や能力の育成に関して

##### (1) 現在の状態について

図11は、社会的態度や能力の育成に関する現在の状態についての、5項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. スポーツにおけるマナーの理解と実践」及び「B. スポ

ーツ活動における協力と責任」では、それぞれ75%、60%と多くの者が肯定的な応答を示しており、否定的な応答はそれぞれ4%、8%ときわめて少ない。しかし、「C. 運動集団への積極的参加」及び「D. スポーツ活動における指導性」では肯定的な応答と否定的な応答がともに約30%の値を示している。また、「E. 将来におけるスポーツ活動の推進と指導」では、肯定的な応答(23%)よりも否定的な応答(39%)が多くなっている。

マナーや協力・責任に比べ、指導性を身につけることは困難であることがわかる。しかし、1年生と4年生の応答を比較すると、

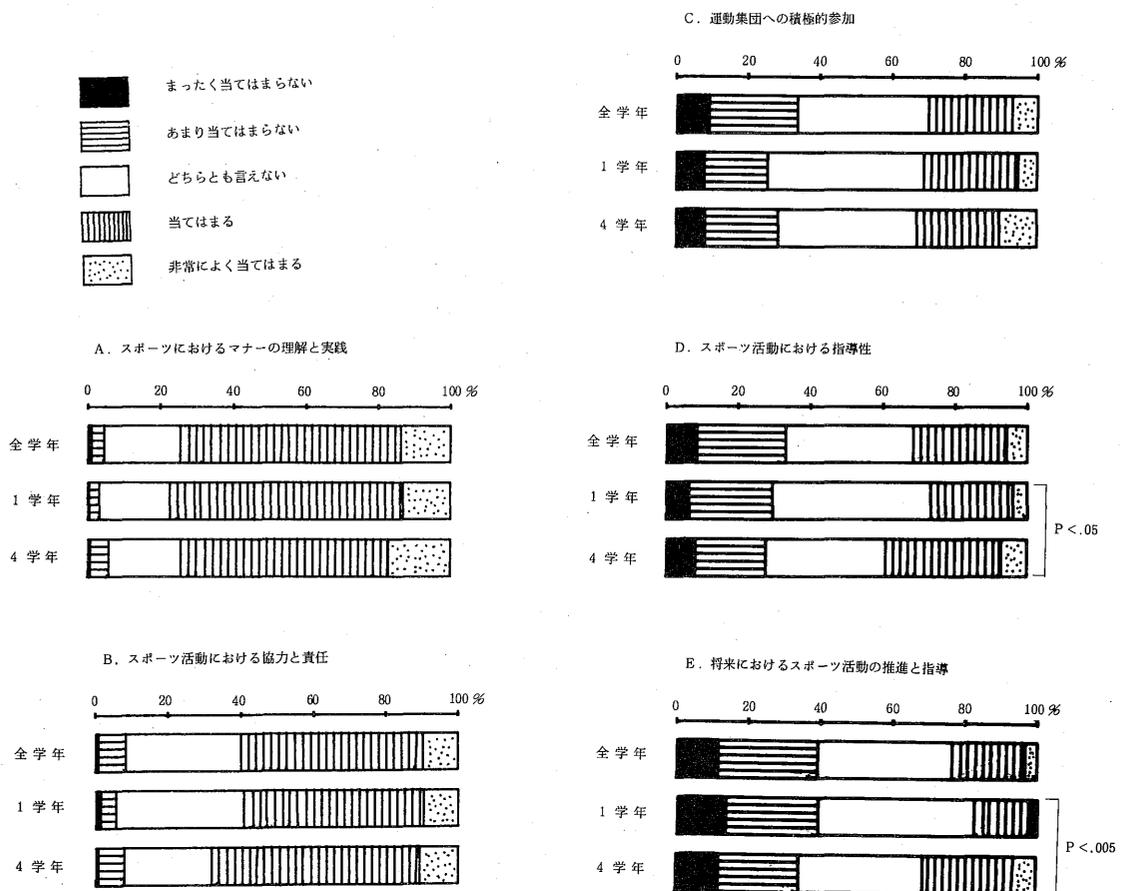


図 11. 現在の状態に関する応答結果  
 — 「社会的態度や能力の育成」 —

「D. スポーツ活動における指導性」及び「E. 将来におけるスポーツ活動の推進と指導」において、4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が有意に多くっており、学年が進むにつれて、指導性も育成されるようになるといえる。

(2) 体育授業の効果について

図12は、社会的態度や能力の育成に関する体育授業の効果についての、5項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. スポーツにおけるマナーの理解と実践への効果」では、肯定的な応答が52%とほぼ半数を占め、否定

的な応答は9%と少ない。「B. スポーツ活動における協力と責任への効果」においても、肯定的な応答が39%で、否定的な応答の17%よりも多い。しかし、「C. 運動集団への積極的参加への効果」、「D. スポーツ活動における指導性への効果」、及び「E. 将来におけるスポーツ活動の推進と指導への効果」では、肯定的な応答（Cは16%、Dは22%、Eは26%）よりも、否定的な応答（Cは42%、Dは35%、Eは32%）が多くなっている。したがって、マナーや協力・責任への体育授業の効果は高いが、運動集団への参加、指導性については効果が低く、今後の授業のあり方につ

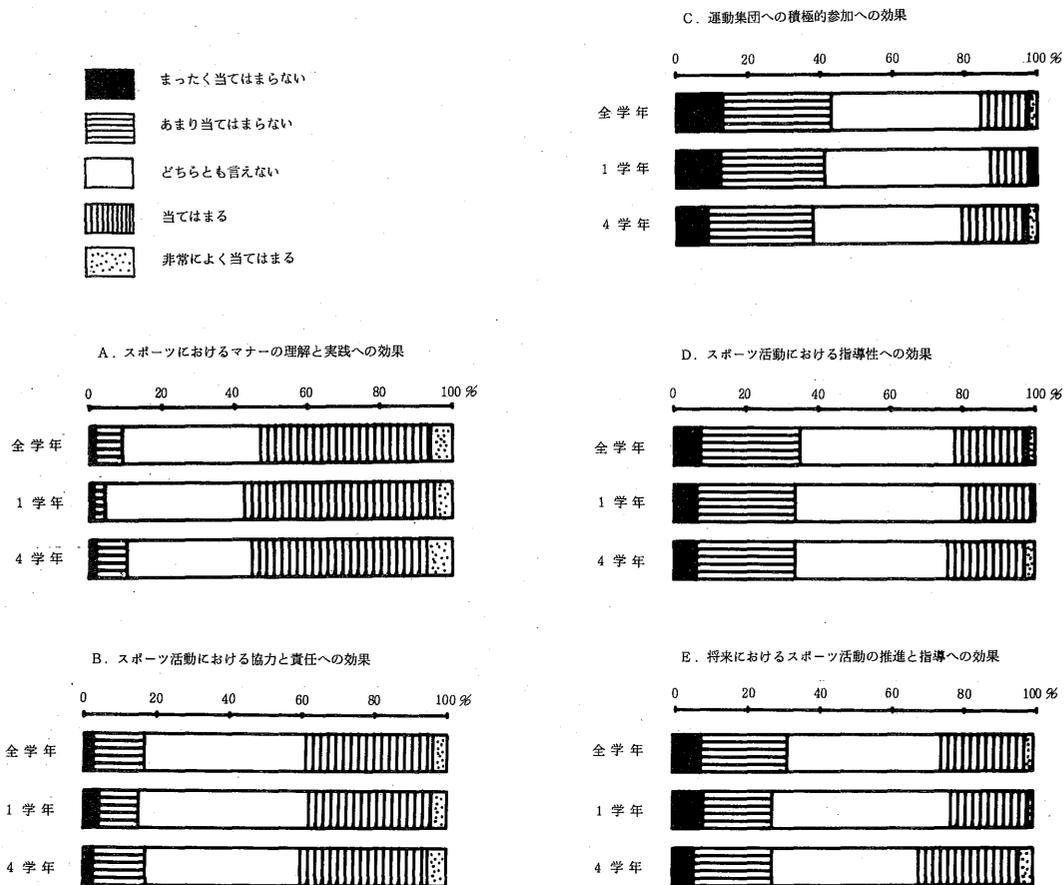


図 12. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「社会的態度や能力の育成」—

いての課題として検討する必要がある。

1年生と4年生の応答を比較してみると、「C. 運動集団への積極的参加への効果」、「D. スポーツ活動における指導性への効果」、及び「E. 将来におけるスポーツ活動の推進と指導への効果」については、4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多くなる傾向にあり（有意差なし）、徐々にではあるが、4年間の体育授業の効果が認められる。

## 5. 生涯体育への基礎づくりに関して

### (1) 現在の状態について

図13は、生涯体育への基礎づくりに関する

現在の状態についての、5項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「A. 体育・スポーツへの興味・関心」及び「C. スポーツ観戦への嗜好」では、肯定的な応答が約80%と著しく多く、否定的な応答は約10%と少ない。「B. 日常生活を豊かにするための運動・スポーツの実践」においても、約50%と半数の者が肯定的な応答を示しており、否定的な応答の25%よりも多い。これは、これまで見てきた「健康のための運動実践」(図1のD)、「体力のための運動実践」(図5のC)、「技能のための運動実践」(図10のB)よりも高い値

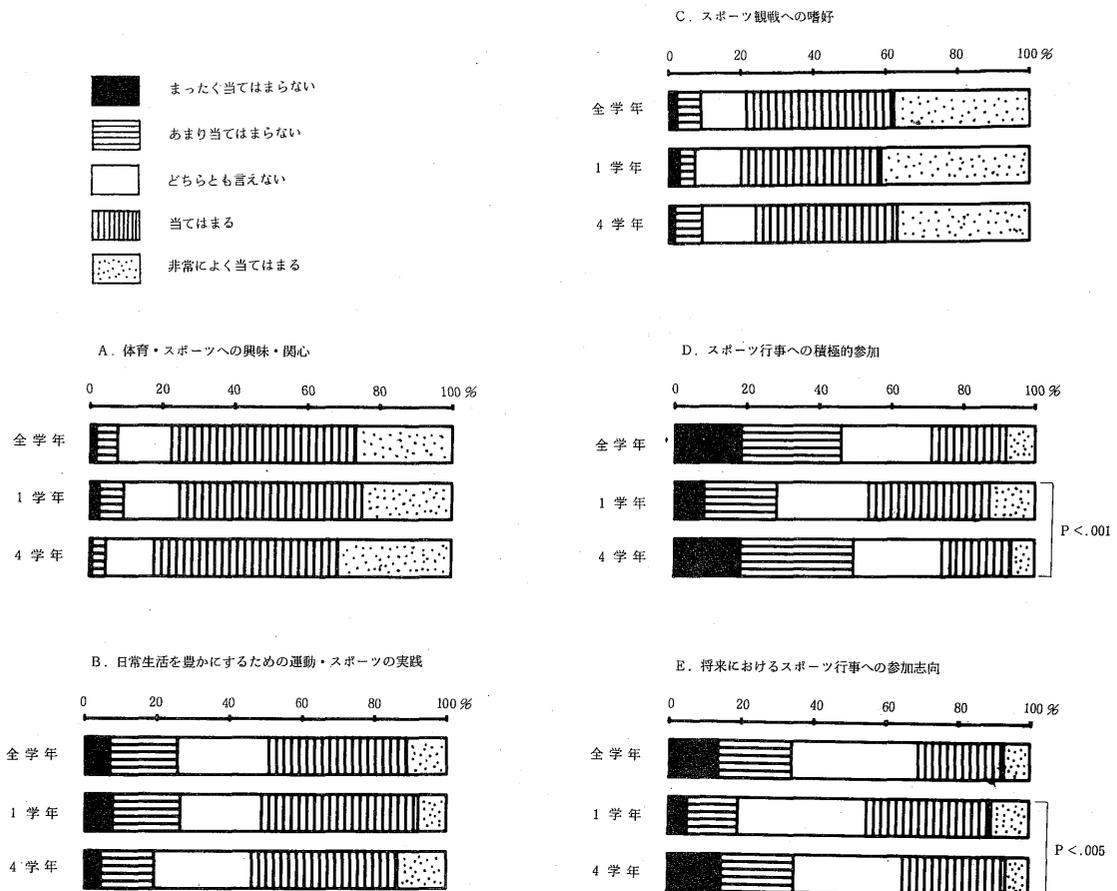


図 13. 現在の状態に関する応答結果  
—「生涯体育への基礎づくり」—

であり、同じ運動実践でも、日常生活を豊かにするために運動している学生が多いことがわかる。

一方、「D. スポーツ行事への積極的参加」では、肯定的な応答 (28%) よりも、否定的な応答 (46%) が多い。これは、自由に運動することは好むが、与えられた行事に参加して運動することを嫌う傾向が本学学生にみられることを示唆するものである。「E. 将来におけるスポーツ行事への参加志向」では、肯定的な応答、否定的な応答ともに約30%と、現状よりは将来に向けてのほうが多少望ましい方向へ変化している。

1年生と4年生の応答を比較してみると、「A. 体育・スポーツへの興味・関心」及び「B. 日常生活を豊かにするための運動・スポーツの実践」では4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多いが、「C. スポーツ観戦への嗜好」、「D. スポーツ行事への積極的参加」、「E. 将来におけるスポーツ行事への参加志向」では、逆に4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が少なく、否定的な応答が多くなっている。 $\chi^2$ 検定の結果、D及びEで有意な差が認められた。現状においても将来に向けても、学年が進むにつれて、スポーツ行事への参加を嫌うようになることは、ス

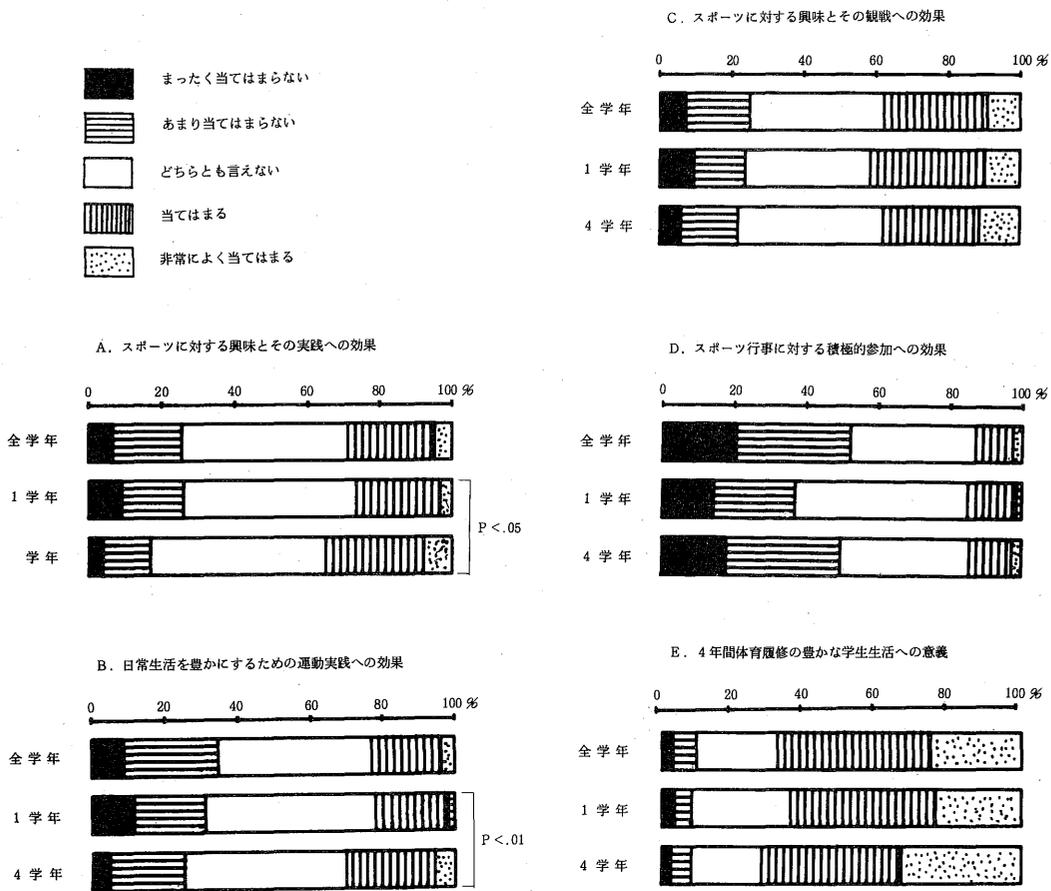


図 14. 体育授業の効果に関する応答結果  
—「生涯体育の基礎づくり」—

スポーツ行事のあり方について今後の検討が必要であると考えられる。

(2) 体育授業の効果について

図14は、生涯体育の基礎づくりに関する体育授業の効果についての、4項目の質問に対する応答結果を示したものである。

全学年の結果を見ると、「C. スポーツに対する興味とその観戦への効果」では、肯定的な応答(38%)が否定的な応答(24%)よりも多いが、「A. スポーツに対する興味とその実践への効果」では、肯定的な応答(29%)と否定的な応答(25%)との差が少ない。肯定的な応答が少なかったことについては、

体育の授業を受ける以前からそのスポーツ種目を好む者が多かったためと考えられるが、否定的な応答が約25%あったことについては、今後の体育授業のあり方について検討すべき課題であるといえよう。

また、「B. 日常生活を豊かにするための運動実践への効果」及び「D. スポーツ行事に対する積極的参加への効果」では、肯定的な応答(Bは22%, Dは13%)よりも否定的な応答(Bは35%, Dは52%)が多く、今後の授業のあり方について十分に検討すべき課題であると考えられる。

「E. 4年間体育履修の豊かな学生生活へ

の意義」については、否定的な応答はわずか9%であり、68%と多くの学生が肯定的な応答を示した。このことより、本学独自の4年間体育実技履修制度が大半の学生に望ましく受けとめられていることがわかる。

次に、1年生と4年生の応答を比較してみると、「A. スポーツに対する興味とその実践への効果」及び「B. 日常生活を豊かにするための運動実践への効果」においては、4年生のほうが1年生よりも肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なくなっている。これら2項目については、 $\chi^2$ 検定の結果、有意な差が認められた。したがって、これら2項目については、学年が進むにつれて、体育授業の効果が高まっているといえる。

また、有意な差は認められなかったが、「E. 4年間体育履修の豊かな学生生活への意義」においても、4年生のほうが肯定的な応答が多くなっている。

#### IV ま と め

1) 体育授業の目標に関する現在の状態については、20項目において、肯定的な応答が否定的な応答よりも多く、全体的に良好な状態にあることが明らかにされた。なお、「大学入学後の体力の向上」、「将来におけるスポーツ活動の推進と指導」、「スポーツ行事への積極的参加」などの6項目においては、否定的な応答のほうが多かった。

2) 体育授業の効果については、16項目において肯定的な応答が否定的な応答よりも多く、全体的に体育授業が効果的であることが明らかにされた。なお、「スポーツ行事に対する積極的参加への効果」、「運動集団への積極的参加への効果」、その他、健康や体力や技能のための「自主的な運動実践への効果」などの9項目においては、否定的な応答のほうが多かった。

3) 体育授業の目標に関する現在の状態につ

いては、次の11項目において、4年生のほうが1年生よりも有意に肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なかった。①将来における健康の保持・増進のための運動実践の意図、②体力があるの一部（調整力、形態と体力のバランス）、③大学入学後の体力の向上の一部（力やパワー、調整力、持久力）、④将来における体力の維持・向上のための運動実践の意図、⑤楽しめる程度の技術水準のスポーツの保有、⑥大学入学後の技能の向上、⑦技能向上のための練習・指導法の理解、⑧将来における運動技能向上のための運動実践の意図、⑨運動の良否の判断、⑩スポーツ活動における指導性、⑪将来におけるスポーツ活動の推進と指導——これらは、体育授業の効果が少なからず関与しているものと考えられる。一方、①スポーツ行事への参加、②将来におけるスポーツ行事への参加志向——では、4年生のほうが1年生よりも有意に肯定的な応答が少なく否定的な応答が多かった。

4) 体育授業の効果については、①健康の重要性の理解への効果、②体力の維持・向上のための運動実践への効果、③日常生活を豊かにするための運動実践への効果、④スポーツに対する興味とその実践への効果——の4項目において、4年生のほうが1年生よりも有意に肯定的な応答が多く、否定的な応答が少なかった。これらの項目については、学年が進むにつれて、体育授業の効果が高まっていると考えられる。

以上のことより、体育の目標に関する現在の状態は、全般的にはほぼ良好であること、体育授業の効果についてもほぼ有効であることが明らかにされた。また、「4年間体育履修の豊かな学生生活への意義」においては、68%と多くの学生が肯定的な応答を示し、本学独自の4年間体育実技履修制度は大半の学生に望ましく受けとめられていることが明らかにされた。もちろん、いくつかの項目については否定的な応答が多く、これらについては、

今後の授業のあり方において十分に検討されなければならない。

なお、本研究の成果より、体育の目標全般にわたる効果測定に妥当と考えられる項目が多くみられたが、今後はこれらの項目の妥当

性、信頼性を一層高めていくとともに、授業開始時と授業終了時に同一の調査を実施して両者を比較するなど、より厳密な手順で授業効果を測定していく必要がある。

#### 参 考 文 献

- 1) 浅田隆夫他；正課体育に関する調査，大学体育研究（筑波大学体育センター編），No. 1，1～6（付属資料），1979
- 2) 阿部忍；体育哲学（新体育学講座 Vol. 58），29 - 35，逍遥書院，1972
- 3) 海野孝，佐藤靖；4年間の体育授業を通しての意識の変化，大学体育研究，No. 3，54 - 64，1981
- 4) 川村英男；体育原理（改訂10版），196 - 214，杏林書院，1978
- 5) 前川峯雄；体育原理（現代保健体育学大系・改訂3版），160 - 195，大修館書店，1970
- 6) 前川峯雄，江橋慎四郎（編）；体育科教育法（改訂6版），15 - 36，杏林書院，1975
- 7) 筑波大学体育研究会；大学体育教本，9 - 14，不昧堂出版，1977
- 8) 山下和彦他；筑波大学生の体力・運動能力の現状，大学体育研究，No. 1，59 - 72，1979